

ESDに基づく主体的な学び手の育成

Developing Active Learners Based on ESD

中村 秀司^{#1}, 大島 純^{#2}, 大島 律子^{#2} Shuji NAKAMURA^{#1}, Jun OSHIMA^{#2}, Ritsuko OSHIMA^{#2}
^{#1}鳥取県立鳥取西高等学校, ^{#2}静岡大学 ^{#1}Tottori Nishi High School, ^{#2}Shizuoka University

＜要旨＞ ESD（持続可能な開発のための教育）をベースに高等学校「地理」、総合的な学習の時間等において、主体的な学び手を育成する枠組みの開発と実践を進めた。具体的には、教科での知識構成型ジグソー法やPBLを用いた授業実践、総合的な学習の時間のPBL、自主的な教育活動での調査研究、学会発表への参加等、段階的な枠組みをデザインすることによる主体的な学び手の育成を試みた。その結果、問題解決の行動主体の育成に結びつき、ESDに基づく教育活動の組織化が進んだことから、ESDの主体的な学び手の育成と創発的な学習コミュニティの形成への寄与が認められた。

1. はじめに

高校生が将来能動的に課題解決の原動力として持続可能な社会を担う観点から、「主体的な学び手」を育成することが重要であり、そのための学習機会が、教科、総合的な探究の時間、主体的な学習に埋め込まれる必要がある。

➡ **ESDに基づく枠組みを学習・活動場面に応じて段階的に設計し、その実践を試み、その成果を検証する。**

ESD：様々な活動場面を通して、学び手が解決主体として行動を起こす力を身につける学習に最適。

教科：高等学校地理（地理A・B）

ESDは平成30年告示高等学校学習指導要領における地理歴史においても主軸となる理念の一つに挙げられている。

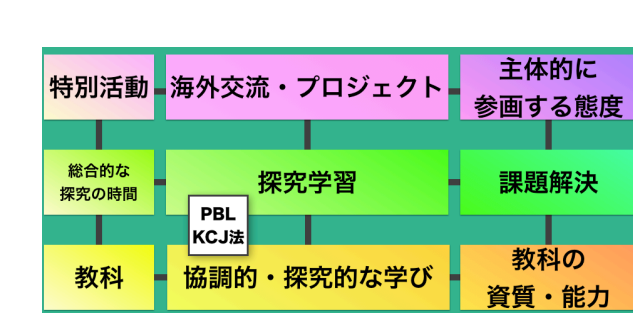


図1 ESDに基づく段階的な枠組み

3. ESD枠組みの実践過程と結果

教科（KCJ法）：中心市街地の活性化（中村 2017）

➡ 必要な知識と思考力等を獲得するとともに意欲的に追究する態度を養う基礎（図3）

KCJ法授業の効果としての「可搬性」の例：中心市街地活性化のためのアイデアを考察した経験で、次の段階にある課題研究や特別活動での調査研究に活用したことが挙げられる。

教科（PBL）：Urban Design Project（中村・クラコビッチ 2018）

課題解決の主体となる意欲を養うためのESD

➡ 主体的な社会参画態度の向上（図4、図5）
直接的な要因の関与は特定できないが、前述のKCJ法による学習や教科「地理」による実施の影響が一因に想定される

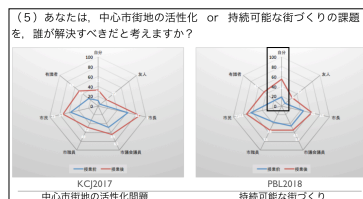


図4 課題解決の主体を「私」として解答のKCJ法とPBLの比較

総合的な探究の時間（PBL）：トンレサップ湖水上スクールの設計

気候変動 ➡ 日本地理学会ポスターセッション理事長賞、SDG関連の映像制作、米国の大学との共同研究

ESDの総体：「学習の方略・メタ認知」

➡ 学年が進むにつれ高次に移行し、年次が進むにつれ第3学年の定点で高次に回答が増加（図6）

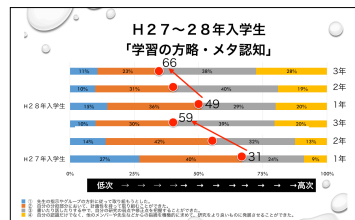


図6 「学習の方略・メタ認知」に関するアンケート調査（左：学年進行、右：第3学年）

4. 主体性を促す教育実践のための重要な要素

学習者の主体性の萌芽から問題解決の行動主体の発現までの過程における主体性を促進する要素：

①KCJ, PBL等の協調学習による授業実践及び総合的な学習（探究）の時間でのPBLのデザインによる学習者による「可搬性」の発揮

②学校総体としての学習環境デザインによる創発的な学習コミュニティの形成

ESD：これらを促進するための内容と育成すべきコンピテンシーの側面から、双発する可能性の高い親和性を持つ。

参考文献

- 中村秀司（2017）知識構成型ジグソー法を用いた「中心市街地の再生」に関する授業実践。地理の広場137, 全国地理教育研究会, 70-80, 東京都
中村秀司・Stefan Klakovich（2018）ESDを推進するプロジェクト学習に関する授業実践—スマートグロースを活用した「アーバンデザインプロジェクト」—. 日本地理学会春季学術大会
ジョセフ・ス・クレイチャック・ナムスー・シン（2016）河崎美保（訳）課題解決型学習、学習科学ハンドブック第2巻, 17-35, 北大路書房

2. 研究の方法

SGH（スーパーグローバルハイスクール）指定校で段階的枠組みをデザイン（図1）し「主体的な学び手」の育成を試みた。

教科：知識構成型ジグソー法（KCJ法）とPBLによる協調学習を設計し、日本の都市計画と米国のスマートグロース政策に基づいたUrban Design Projectを主題とする学習を実施し、学習成果物や生徒の到達度から評価を測定した（中村・Klavovich 2018）。

総合的な探究の時間：2017年と2018年に活動した2種類のPBLに基づいて、PBL課題設計の適切さ（図2）とともに、生徒の到達度から評価を測定した。

ESDの総体：SGH校が実施したアンケート結果と分析を用いた。

特別活動：生徒が主体的に参加し取り組んだ活動への発展を挙げた上で、成果物や表彰実績を用いた。

